氏　　名　今田　絵里香（いまだ　えりか）
学位(専攻分野)　博　士（人間・環境学）
学位記番号　人　博　第　340　号
学位授与の日付　平成18年7月24日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　人間・環境学研究科人間・環境学専攻
学位論文題目　「少女」というジェンダー・アイデンティティ
——『少女の友』における意味世界と読者——

論文調査委員　（主査）教授 小山静子　教授 田邊玲子　教授 稲垣恭子

論文内容の要旨

近代日本において生み出された「少女」というジェンダー・アイデンティティはどのようなものであり，それが歴史的にどのように変遷していったのかを明らかにしたのが本論文である。その際に，本論文は二つの視点からこの課題に迫っている。すなわち，少女雑誌が創出し，流布させていった「少女」というジェンダー・アイデンティティとはどのようなものだったのかという問題と，読者である少女たちがそれをどのように受け取っていったのかという問題である。以下，論文の論述順序にしたがって，その概要を述べていきたい。

本論文は，序章と7つの章，並びに終章によって構成されており，まず序章において，本論文の問題関心が述べられ，課題の提示が行われている。

それに続く第1章「少女雑誌とジェンダー・アイデンティティ」では，まず近代日本の「少女」について論じた先行研究を整理した上で，その不十分な点を明らかにし，解明すべき具体的な課題，すなわち，①「少女」の歴史的変遷，②「少女」とその「抵抗」の意味，③「少女」を下支えした論理，の3点を明らかにすべきことが提示されていく。ついで，「少女」とは都市の新中間層の女子をさすことが指摘され，「愛護と教育の対象としての子ども」という新中間層の子どもの特徴が，先行研究を通して明らかにされている。そして「少女」が新中間層の女子をさすがゆえに，彼女たちが親しんだ少女雑誌を検討する必要性が述べられ，少女雑誌を分析する際の分析枠組みが示されるとともに，本論文が検討する少女雑誌の中で重要な位置をしめる『少女の友』の読者層や発行部数が述べられている。

第2章「「少女」の創出—少女雑誌以前」は，「少女」というジェンダー・アイデンティティが生み出されていくプロセスについて論じた章である。そのために，少女雑誌・少年雑誌という，いわゆる性別雑誌が登場する前の子ども雑誌である『穎才新誌』を検討し，教育制度が男女別学化・別カリキュラム化することによって，男子向けの「少年」というジェンダー・アイデンティティとは異なった，「少女」というジェンダー・アイデンティティが誕生したことが明らかにされている。

第3章「「少女」のヴィジュアル・イメージの変遷」では，戦前の代表的な少女雑誌・少年雑誌の表紙絵を，容貌，しぐさ，ファッションなどに着目しながら分析している。そのことを通して，①少年のヴィジュアル・イメージはほとんど変化がないのに対して，少女の場合は，19世紀末，1920年代半ば，1930年代後半と変化していくこと，②男女のヴィジュアル・イメージは大きく異なっていること，③「愛護と教育の対象としての子ども」という子ども観は，少女の場合には1920年代になって登場することが述べられている。

第4章「「少女」イメージの変遷—少女小説における家族関係の変遷」は，創刊から敗戦までの『少女の友』に掲載された小説を取り上げ，そこにおいて少女と親きょうだいの関係がどのように描かれているかを分析している章である。「孝」と「近代家族的な情愛（母性愛）」，「権力的な関係」と「情緒的な関係」を分析視点とすることで，親への一方向的・絶対的な献身である孝から，近代家族的な情愛へと行為規範が変化し，一定の自由と一定の自主性を確保できる少女期が生まれたことが明らかにされている。

第５章「少女ネットワーク」では，読者である少女たちが，少女雑誌が提示する「少女」というジェンダー・アイデンティティをどのようにとらえていたのかということを，『少女の友』の投稿欄を分析することを通して検討している。そして投稿欄によって形成された読者同士のコミュニティは，現実に，親密かつ広範なネットワークへと発展していったことが明らかにされている。またそのコミュニティを維持し，少女ネットワーク内の仲間意識を高めていくために，その紐帯の核としての「少女らしさ」が構築され続け，しかもそれは雑誌の編集者の意向に一致させる形で行われことが述べられている。

第６章「エスという関係」では，『少女の友』や『少女画報』で大流行した友情小説を検討し，「少女」というジェンダー・アイデンティティを核にした読者同士の関係や，エスという少女同士の親密な関係の意味が論じられている。その結果，このエスという関係は，少女の性的な逸脱を防ぐと同時に，強制的異性愛を補強するものになり，また既存の体制の対抗文化ともなり得たことが明らかにされている。

第７章「「少女」の憧れ」は，「少女」が「大人」へどのように接続していくのかという問題を扱った章であり，『少女の友』や『少女画報』が掲げる理想的な大人の女性像を分析することを通して，少女にとっての「成功」の意味を考察している。その結果，①1910年代以降，少女の「成功」は業績主義にのっとったものへと移行していくこと，②しかし少女の「成功」は少年よりも文化資本・経済資本・社会関係資本と密接に関わっており，属性との結びつきが強いこと，③少女の「成功」は現実逃避と現実補強をもたらす「憧れ」であったことが述べられている。

そして最後に終章では，「少女」というジェンダー・アイデンティティの変遷を４つの時期，すなわち成立期，移行期，確立期，再編成期に区分して論じ，まとめが行われている。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は，近代日本社会において生み出された「少女」というジェンダー・アイデンティティがどのようなものであり，それが社会的状況の変化にともなってどのように変遷していったのかを論じたものである。そして「少女」というジェンダー・アイデンティティが，少女雑誌によって創出され，流布していったがゆえに，少女雑誌，その中でも特に『少女の友』に焦点をあて，そこに現れた「少女」という表象と「少女」をめぐる言説を分析している。なおその際に，本論文では，雑誌がどのような少女像を生みだしていったのかという側面と，それを少女たちがどのように受け取っていったのかという側面に留意しながら，「少女」というジェンダー・アイデンティティの解明を行っている。

その結果，本論文には，これまでの研究状況を切りひらく新しい知見を見いだすことができるので，それがいかなるものであるか，本論文がもつ研究上の意義について，以下，述べていきたい。

第一に指摘できることは，ジェンダーの視点を用いて，近代日本における子ども観を分析したことである。子どもとは，かわいがられ，教育されなければならない存在である，という子ども観は，現代に生きるわれわれにとっては，ごく当たり前のものである。しかしこの「愛護と教育の対象としての子ども」という子ども観は，西欧の社会史研究者によって，近代になって生まれたものであることが明らかにされ，日本では，このような子ども観は，第一次大戦後に本格的に登場してくる都市部の新中間層に顕著にみられることが，先行研究において指摘されてきた。しかしながらこれまでの研究は，都市新中間層の子どもを男女の区別なく，一枚岩的に論じており，したがって，そこに当然存在していたと思われる，性別による相違にさほど関心が払われないという問題が存在していた。このような研究状況を克服する点において，本論文には大きな意義が存在するといわねばならない。

第二には，ジェンダーを分析視点としたことで，子どもがけっしてジェンダー中立的な存在ではなく，少女と少年の間には明白な相違が存在することが明らかになったことである。本論文は，戦前の代表的な少年雑誌と少女雑誌の表紙絵に表れたヴィジュアル・イメージを比較検討しているが，その結果，少年のヴィジュアル・イメージは19世紀末から第二次大戦までほとんど変化がないのに対して，少女の場合は19世紀末，1920年代半ば，1930年代後半と大きく変化し，「愛護と教育の対象としての子ども」という近代の子ども観が少女にみられるのは，少年よりも40年ほど遅れて，1920年代になってからであることが明らかになった。また，少女にとっての「成功」が，少年同様に業績主義へ移行したといっても，少年の「成功」が学歴を媒介としたものであるのに対して，少女の「成功」は，少年よりも文化資本・経済資本・社会関係資本と密接に関わっており，業績よりも属性との結びつきがより強く，現実逃避と現実補強をもたらす「憧れ」であったことが論じら

れている。このような知見は，ジェンダーを分析視点として導入した結果得られたものであり，とりわけ，業績主義の意味が男女において相違することが明らかになったことは，女性と学歴に関する研究の進展に寄与するものである。

第三に指摘できることは，少年像が時代によってさほど変化しないのに対して，「少女」というジェンダー・アイデンティティは，社会的状況の変化によって大きく変遷していくことが，本論文で明確化したことである。すなわち，「少女」というジェンダー・アイデンティティは，母親に監督・保護される脆弱な存在から，愛護され教育される存在へ，さらには国民としての意識を明確にもつ「日本の少女」へと，時代とともに変化していった。これまでの少女研究が，主に19世紀末から20世紀初頭にかけての，少女の成立期における少女像だけを論じていたことを考えれば，本論文が少女雑誌の分析を通じて，成立期のみならず，1945年までの少女像を明らかにしたということは，画期的なことであるといえる。

そして第四には，少女たちを単に雑誌の読み手・客体としてとらえるのでなく，少女たち自らが主体として「少女」というジェンダー・アイデンティティをどのように受け取っていったのか，という問題を論じていることである。すなわち，少女たちは雑誌が提供する「少女らしさ」を積極的に受け取り，雑誌の投稿欄を通した読者同士のコミュニティの形成や，現実の親密かつ広範なネットワークの成立に際して，「少女らしさ」を紐帯の核として構築し続けたことが本論文で明らかになった。このように少女たちを客体としてだけでなく，主体としてもとらえたことにより，「少女」というジェンダー・アイデンティティの形成をめぐる歴史叙述をよりダイナミックに行うことが可能となっている。

本申請者が所属する人間・環境学専攻人間形成論講座の目的の一つは，社会環竟における人間形成の機序の解明にあるが，以上の点に鑑みて，本研究はこの目的にそった基礎的研究として高く評価できる論文であり，教育社会史研究分野への貢献が大いに期待できる。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成18年５月11日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。